

# 言語習得と生得性

呉羽 真 (Makoto Kureha)

京都大学

言語進化に関していかなる立場を採ろうとも、言語習得のための心的メカニズムの進化を考えざるをえない。この際、N. Chomsky、S. Pinker、R. Jackendoffらは、「普遍文法」と呼ばれる生得的言語能力の進化を仮定する。Chomskyらの言語生得説は周知のように多くの批判にさらされてきた。しかし、言語能力の「生得性」が何を意味するか、という点が正しく理解されていないために、言語生得説を巡る議論はしばしば不毛なものになっている。また、同じ理由で、言語生得説を巡る議論が言語進化に関してもつ含意は自明ではない。

本発表は、認知科学における「生得性」概念に関する哲学者 (R. Samuels) の提案を用いて、言語生得説とこれに反対する立場 (J. Elman, M. Tomasello など) との間の実質的な対立点と見かけ上の対立点を区別し、言語生得説を巡る議論が言語進化に関してもつ含意を明らかにすることを試みる。

「生得性」は混乱した概念である、という P. Griffiths の批判に対して、Samuels は、これが「心理学的原初性(psychological primitiveness)」という意味で理解できる、という説を提案している。この説によれば、生得的な形質とは、通常の発達過程において獲得され、またその獲得が心理学的には説明されえないような形質である。

言語生得説において使用されている「生得性」概念は Samuels の原初性説の範囲内で理解できる。これに従えば、言語能力の生得性は、それがどのような生物学的プロセスないしメカニズムによって発生するかに関して幅広い可能性を許容する。Elmanらは、普遍文法の仮定が生物学的に見て強すぎるテーゼ (文法原理は人間の遺伝子に直接コード化されており、生得的に脳内で表象される) を含んでいるとして言語生得説を批判してきたが、このようなテーゼを排除しても言語生得説は維持可能である。

言語生得説に対して実質的な代案を成しうるものとして、Tomasello の言語習得理論を紹介する。Tomasello は、子どもは、生得的言語能力ではなく、「意図読み取り」と「パターン発見」という領域一般的スキルを用いて言語を習得する、と主張する。この立場では言語 (特に、抽象的構文) を習得するメカニズムは心理学的に説明されるので、これは原初性説に照らして言語生得説に対立すると言える。

原初性説によれば、言語能力のように複雑な機能的形質が生得的であるということは、それが適応的進化の産物であるという (弱い) 証拠を与える。これに対して Tomasello の説によれば、言語の複雑な機能性は、生得的言語能力の適応的進化に訴えずとも、学習スキルの前適応と言語それ自身の文化的進化 (「文法化(grammaticalization)」) によって説明できる。